

いわき支部だより

発行責任者:いわき支部長 柴田昭浩

発行日:平成23年10月17日 平成23年度 第2号

1) ピンクリボンキャンペーン in IWAKI を開催

9月11日(日)、いわき市かしまショッピングセンターエブリアにおいて福臨技公益事業ピンクリボンキャンペーンを開催しました。

いわき支部からは29名、総数33名が実務委員として参加し、乳がん触診模型による触診体験やアンケートを行い、パネル展として「乳がんについて」「検診」「検査技師の仕事紹介」などを展示しました。



特に触診体験コーナーでは、かしま病院 鈴木正明先生の参加を得て、より具体的な説明や相談を受ける事ができました。

また、顕微鏡・モニターによる乳がん細胞の実写や各種乳がんパンフ、グッズの配付のほか子供向けにバルーンアートを行い、200個を配布するほどの好評でした。

案内チラシ配付は1000部、触診体験は212名、来場者総数は約400名となりました。

今回のイベントにより乳がん検診の啓蒙と臨床検査技師への認知度が高まったものと思います。



バルーンアートを担当しました。前日まではうまくいかどうか不安に思う部分もありましたが、皆様のご協力もあり、想像以上に沢山の方々に来ていただくことが出来ました。何より、風船を手渡した時の子供たちの純粋な笑顔がとても印象的でした。担当の方を始め、ご協力いただいた方々には心からお礼申し上げます。

共立 白石 琴美



平成24年度いわき支部学会・総会

日時:平成24年4月14日(土)

場所:いわき市保健福祉センター

第44回福島医学検査学会

日時:平成24年5月27日(日) (予定)

場所:いわき明星大学

2)寄稿「震災～その後」 菅波病院 大和田ナヲ子

3月11日、私用で休みをとっていた。院内での会議出席のため、午後1時に病院に出向く。会議終了後、自宅に戻り10分位経ったか、あの地震が起きた。あまりの揺れに、家の中にいるのが恐ろしく、家の前の広場に飛び出した。細い通りを通常は通らないトラックや大型車両が走り「逃げろ」「逃げろ」と運転手が叫んでいた。何が何だか解らず立って居ると、「津波がきた、逃げろ」若い男性が血相を変え叫びながら高台の方へ駆けて行った。男性の来た方を見ると、波が国道6号を越えてきていた。家の中で地震の被害を見ていた夫に声をかけ、近くの高台にある神社まで夢中で走った。

翌朝、退避先から自宅に帰ると家の1階が瓦礫とヘドロでメチャメチャになっていた。家の内外を見回し、何をどうしたらよいかわからぬまま出勤した。病院も地震と津波で大変な被害を受けていた。

3月14日、原発の水素爆発のため、患者や職員の避難が始まる。

3月17日、家族に連絡がつかない患者や、引き取る家族がいない患者20名を県の災害対策本部より手配してもらったバスで、医師2名、職員11名で受け入れ施設を探しながら、会津若松市の会津高校体育館に避難し、一夜を過ごした。

3月18日、宇都宮の比企病院に患者19名受け入れてもらえる。避難中、患者1名死亡。その後、6月1日まで病院休診となる。

6月1日より、外来診療のみ、医師2名職員15名で（震災前在職者86名）再開となる。しかし、震災前常勤していた医師3名中、2名も去り、待機していた職員も全施設再開の目途が立たず、半数近く辞めていった。

再開しても、警戒区域、緊急時避難準備区域に住んでいる患者様が多かった当院は、患者数が激減してしまった。皮肉なことに、原発事故の終息に係る作業員の健康診断が増える。

病院の本格的な修理が10月11日より始まった。
来年初め、菅波病院ではなく、クリニックとなるようだ。

原発事故がなければ病院の復興も早く進み、辞めざるを得なかった職員もでなかった。

無念。

本号およびバックナンバーは、
福島県臨床衛生検査技師会ホームページ
いわき支部からご覧いただけます。

<http://www.fukushima-amt.or.jp/>

